
終焉と平和

ソフィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終焉と平和

【Nコード】

N8706Y

【作者名】

ソフィア

【あらすじ】

何時かの予言……終焉と平和を選択する少女

炎を操る寄生型エクソシスト、ウィスタと、教団の仲間達とのお話

…

キャラクター設定 ネットバレ注意！

キャラクター設定

名前 ウィスタ・ウォーカー

年齢 16歳（推定）、肉体的にはもつと下

国籍 英国・諾国

身長 164cm

体重 41kg

誕生日 不明（養父・マナに拾われたのが1月12日）

星座 不明

血液型 O型

趣味 読書・料理

好きなもの 野菜・果物・みたらし団子

嫌いなもの 体に悪そうな料理

【性格】

優しく笑顔の可愛らしい少女。

何時なんどきも、自分よりも他人に配慮するウイスタだが、その過去は想像を絶する程の過酷なモノ。

何があっても、何に対しても憎しみを持たず、他者を大切に出来る。仲間には何かあると、自らを犠牲にして助けに入る他、敵であるモノに対しても、愛情を忘れない。

【身体能力】

生まれ憑きの奇怪な右眼と、寄生型にも関わらず、異常なまでの食の細さ。

生まれ憑き右眼に奇怪な模様が刻まれていたウイスタには、

アレン同様にアクマを察知する能力を持つ。

また、寄生型エクソシストとは思えない程の食の細さである。

それに加え、常人では有り得ない程の身の軽さを持ち合わせている。

【特技】

過去、アレンと共に養父マナに教わった為、軽業全般が得意。

その一方、高級レストランのシェフとして働いていたぐらい、料理

が上手。

【目的】

自分の存在理由と、世界の在るべき理由を求めて。

片腕のアレンに対し、両腕にイノセンスの宿っているウイスタは、

最早人間とは思えない自分に疑問を抱き、その存在理由を探し求める為に世界へと歩みを進めた。

アクマにも人間同様、深い愛情を持って接している。

【秘密】

両親を奪い取られた過去。

幼い頃、両親を戦争で亡くし、黒の教団に引き取られていた。

しかし、何らかの理由で黒の教団を逃亡。

決して話そうとはしないモノの、相当大的な‘モノ’を背負っているのは間違いない。

アクマと深い関係のある血族。

ウイスタはアレンの様な呪いが架かっている訳でも無いのだが、最初の頃、

門番にアクマと間違えられた。

テイキに言われた、『俺達の家族』との言葉には、何の関係があるのだろうか…？

【イノセンス】

全てを魂へ還す愛情の深力

ヴォナーノ・ウイスタ（永眠ノ炉）

型ノ形状 寄生型ノ両腕

使用者 ウイスタ・ウォーカー

ウイスタの両腕を形成しているイノセンスは、彼女の十の感情ティースフェイスによって形状が変わる。

【外観】

双方の肩から紐状に延びた炎が、ドレスの様に体を纏う。

装備型と違い、使用者の感情によって形態が変化する事もある。

【特性】

感情によって形態が変わる他、アクマを浄化させる力を持つ。

自らの血液を使うことで、武器や万能薬、ドラゴン等を作り上げる事も可能。

【技】

技は、テイスフェイス十の感情。

怒り・哀しみ・不快・好む・嫌う・恐怖・不安・慈しみ・愛情・憎しみ

この十の感情で構成される。

第一夜*opening*

エクソシスト…

それは

神に魅入られた者達

彼らは闇より表る

禍々しきモノを

葬るために在る

第一夜

opening

神様は、本当にいるのだろうか。

小さい頃に、よく、お父さん、に聞いた質問。

僕は、イナイと思う。

あの時から、僕の神様への想像は変わっていない。

只、

小さな時は、

『もしイタとしたら、自分に対して意地悪だ。』

と、

そうとしか思っていなかった。

その度に、お父さん、は、僕の頭を撫でながら、『何時か解る時が来るよ』なんて、

そんな曖昧な事しか言っではくれなかった。

その頃は、『お父さんも意地悪だ！』って、

拗ねちゃった時もあったけど、

今は、良く解る。

大きくなった僕は、何故『イナイ』と思ったのかが、

解ったんだ。

僕はきつと、

『もし神様がイタラ、きつと憎んでしまうから。神様を、

困らせてしまっから。』

そう、

思っていたんだと、今は考えている。

…なんて、

「…っはい、終しまい！」

「ええええええ！」

そう、手を叩いて微笑んだ少女。

朱色に近い髪色をしたその少女は、

とても楽しそうに目を細めた。

隠されていない、左目を

その少女は、心底楽しそうに笑うと、

今まで彼女の話聞いていた、赤毛の少年が不服そうに口を尖らせた。

「ウイスタは何時も、良いところでバツサリ終わるんさあ！」

「しょうがないでしょう。」

ホントに終わっちゃうんですから。」

どうやら少女は、ウイスタという名らしい。

「それにラビ。」

我が侘いっつてると、もうお話して上げませんからねっ！」

「ええっ!？」

それは流石に、酷すぎるさあぁ！」

涙目で必死に抵抗する彼は、ラビ。

二人は、資料らしき紙が錯乱した部屋の中で、

唯一寛げる二段ベッドの下の段の中で、楽しく談笑していた。

否、楽しく…なのか？

少なくとも、ウイスタは楽しんでいる様だった。

「…それより、ウイスタ。」

「はいはい？」

にこりと微笑んだままにそう返事を返したウイスタに、

ラビは呆れた様に吐息を漏らした。

「確か、リーバーに任務だか何だか言われてたんじゃなかったか？」

そんな彼の言葉に、ウイスタは全く態度を変える事なく、

「ちょっとトイレに行ってきますって、出てきましたから大丈夫、夫じゃないさあ！」え？」

悪びれも無く言い切ろうとした彼女の頭を、ラビがペチツと叩きながら、

小さな子供を諭す様に、微笑を浮かべた。

「その誤魔化し方じゃ、すぐにバレる。

もう戻るんさ。

まっ、方向音痴で心配なのは分かるけどな。」

「方向音痴は認めるが、すぐバレるってのは、聞き捨てなりません！」

少しズレて起こっているウイスタの頭を、苦笑しながら撫でて

背中を押した。

「まっ、やってみんことには分かんねえからな。

行ってこい」

「何だか、上手く言いくるめられた様で悔しいですが、リーバーさんに悪いので、任務を受けに行ってきます。」

最初のラビの様に、次はウイスタが口を尖らせた。

ウイスタは資料を踏まない様に、ゆっくりと歩きながらドアへと進むと、

ラビへと手を振った。

「バイバイ。

行ってくるね！」

満面の笑みを浮かべる彼女を見て、

ラビは嬉しそうに瞳を細めた。

「ああ。

気を付けて行ってくるんさ。」

手をフラフラと振ると、ウイスタはラビの部屋を出ていった。

残された部屋の中で、

ラビは先程までウイスタが座っていた場所の隣に落ちていた資料を
掴み上げた。

「神様…ねえ。」

そこに描かれていたキューブを見ながら、

そう呟いた…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8706y/>

終焉と平和

2011年11月26日23時53分発行